

第3回検討会における意見の概要

- コンテンツや会場設営等についての議論を今後深めていく必要がある。
- この機会に、日本の伝統的な建物だけでなく、日本の木材を使った新しい技術、イノベーションを含んだ建築物による新たな日本文化の発信を世界へ向けて行ってほしい。
- 横浜のような大都市近郊に里山があることが世界でも特殊な文化的遺産であり、そのような強みを世界に発信できると良い。里山自体が、自然素材の倉庫であり、エネルギー供給源という持続可能なシステムであり、自然共生の知恵が隠れている。大阪との対比という観点からも里山の魅力を園芸博で感じてもらえるよう発信することが大事である。
- 現在の計画段階では、園芸博の具体的な部分が見えてこないため、さらなる深堀をしてほしい。「実装」「体験」は重要なキーワード。
- 園芸博をどのように産業振興に活かしていくかの視点を入れてほしい。
- 報告書案の17頁の1行目、「知識や技術」は「知恵や技術」の方が良い。
- ツーリズムの観点から、博覧会全体として環境への配慮が不可欠であることを強く訴えていきたい。展示に限らず博覧会の運営や施設など全体を通して環境配慮がなされたものにする必要がある。それが結果として、日本のツーリズムを発展させ、日本のイメージ向上につながると考える。
- 自然との共生の知恵、Society5.0の進展、SDGs等のキーワードはちりばめられているが、その背景にあるべき骨太なコンセプトや思想が見えず、総花的に言葉が躍っていて、20世紀型のテーマパークの延長に見えてしまう。
- 里山と都市が調和した21世紀型の都市をアジア・モンスーン地域の横浜から発信することに意義がある。会場だけでなく、周辺の農地等、周囲との連携、一体感が極めて重要であり、コンセプトに入れ込むべき。
- 日本の園芸の歴史等を踏まえつつ、SDGsのさらに先の2050年を見据えた骨太なテーマを考えてほしい。1990年の大阪花の万博からの30年もしっかり振り返ったうえで横浜に活かしてはどうか。
- 大阪花の万博はバブル絶頂期に開催され、その際の実施主体と今回の横浜とでは自ずと違ったものになる。実施主体のあり方については海外の事例も参考になる。
- SDGsの実現をテーマに掲げた2025年の大阪・関西万博で盛り上がった流れを引き継いでうまく横浜の園芸博につなげていくことが必要。
- 1990年の大阪花の万博のテーマ「自然と人間との共生」は、SDGsのテーマと重なっており、大阪花の万博の理念も引き継いで横浜で発展させられると思う。横浜では、都市の中での農や里山のあり方というものをどのように表現するかが重要になってくる。
- 世界で多発している異常気象や自然災害に対する日本の知恵を伝えることもテーマの一つになり得る。

- 多くの国に出展いただくために、2027年横浜園芸博と同時期に次々回 TICAD の横浜開催が実現できると良い。
- 計画では会場用地は約 100 ヘクタール、一日の来場者数 15.6 万人想定であるが、かなり高密度である。また、43%が自家用車で来ると予想されているが、駐車場の課題もある。来場者の輸送について、平準化も含めてしっかり考えること。
- 瀬谷駅からの新交通整備もかなりのスピードで進めなければ間に合わない。具体的なスケジュールの策定を早期に検討してほしい。
- 「Well Being」の観点で人と自然との関わり合いを見せられると良い。例えば、植物があると学習がはかどるとか健康回復効果がある等、エビデンスを示して体験できると良い。
- 世界に冠たる日本の花き園芸文化（品種改良技術、生け花、庭園等）を発信できると良い。
- 1960年代頃から6大事業により都市の骨格を作った横浜が少子高齢時代の次のステージを迎えている中、港の都心に加えて、園芸博覧会を起爆剤として緑や農のある新たな中心ができれば、市全体がバランス良く発展していけるのではないか。
- 園芸博覧会は民間企業もチャンスととらえ、スポーツや、人とテクノロジーの融合などの創意工夫、サービスなどを考え直すきっかけとなるのが理想である。
- 戦後、米軍の基地施設に多くの土地を接収されてきた横浜の歴史を振り返ると、返還された上瀬谷で園芸博が開催されることは、横浜における戦後の時代に一つの区切りがつけられるという歴史的な意義がある。横浜が新たな発展をしていくための博覧会であり、市民とともに成功するように取り組みたい。
- 農業の持続のためには、AIなどの最先端技術だけでなく、「里山」等で培われた知識や技術が重要であり、園芸文化は農家や一般の方々によって持続していることを忘れてはならない。
- 園芸に対する人々の心を動かすことができるよう、身近に感じられるような感動体験を多くできる場であってほしい。2027年からだけでなく、博覧会の準備段階やプロセスにおいて園芸文化が盛り上がっていくような取組みを期待する。
- 上瀬谷において、都市の中にあって里山に住むような新たなまちづくりのモデルを作るのだとすると、7年後を目標にするのではなく現時点からどのようなまちにしていくのか、多くの人たちと一緒に考え、たくさんのファンを作りながら検討を進めてほしい。
- 全体的に計画内容が盛り込みすぎであり、これまでの万博と同様混雑が予測される。来た人がゆっくりと歩いて快適さを体感できるように、里山文化を中心に絞るなど、引き算で計画すべき。
- 書いてあることは立派だが、博覧会もまちづくりもフィジカルなイメージが湧いてこない。博覧会が契機になって、新しい良いまちづくりができることが重要。少子高齢社会における都市近郊の農業の姿も不明確。

- SDGs の観点からは、超高齢社会の日本において「こんな風に人生 100 年、園芸を楽しむんだ」という、これからの明日が楽しみになるような要素が盛り込まれるとよい。高齢者、障がい者、在住外国人など多様な人たちが植物を身近に感じ、一緒に園芸を楽しむことができる場となるよう準備すべき。
- 展示する植物は、正しい学術名で表記する必要がある。
- 園芸博覧会を通して、日本の里山に代表される環境、共に生きる知恵を世界に提示してもらいたい。その意味では、計画文書の中にある「環境とともに生きる」は「自然とともに生きる」が良い。
- 空いた地域の有効利用のための博覧会になってはつまらない。
- 一般的に横浜は港のイメージが強いが、里山地域も忘れてはならない宝物であると訴えかける博覧会になるよう、里山にもともとある技術や知恵を住民の方と一緒に掘り起こして発見していくようなものにするべき。
- プロセスに人々を巻き込んでいくことで結果的にそれが広報や PR になると考える。地域の人々に「ここで博覧会を行う意味」を再認識してもらえるような取組みを今から始め博覧会を盛り上げて行ってほしい。
- 博覧会に関わる者は、様々な想定を検討、フィードバックし、これを反復させながら積み重ねていくことが大事。
- 跡地利用ありきで「〇〇のための博覧会」と言われることがないように、その先にある大きな社会的目的を達成するための持続的なマネジメントのプロセスとして博覧会を行うべき。横浜市が郊外部についてどのようにまちづくりを進めるのかという発想を持つことが大事で、その中で博覧会が息づいてくることが重要である。
- 交通計画についても 2027 年には自動車に対する否定的な意見も出てくる頃かも知れず、駐車場も環境に配慮する必要がある。